

火災に遭った世界遺産、パリのノートルダム寺院(大聖堂)はフランス人の心のよりどころとなってきた。慶応大学教授の小倉孝誠氏が歴史をたどりながら、この建築が持つ精神性を解説する。

年間1300万人の観光客が訪れるノートルダム大聖堂で、15日の夕方、火災が発生し、中央に聳えていた尖塔と屋根の3

焼損のノートルダム寺院



壮麗なゴシック建築はパリの歴史を彩ってきた(シャルル・メリヨン「ノートルダム寺院の後陣」、1854年)＝ユニフォトプレス提供

慶応大学教授
小倉 孝誠

一種の連帯感が漂っていた。この日、マクロン大統領は急遽火災現場に姿を現し、大聖堂の再建を国民に約束した。

市民や国家元首からつ

分の2が焼失した。8時間続いた火災はニュースやSNSの映像であつという間に世界中に広まり、その衝撃はいまだに収まっていない。私自身も、フランスのニュース番組で尖塔がゆっくりと

仏国民結んだ「貴婦人」

信仰の光、歴史とともに

崩落する光景を見た時は、ほとんど信じがたい思いで、これが夢であつてほしいと願ったくらいである。

現場周辺では数多くのパリ市民と観光客が不安

のような反応が生じた。地の一つとしてひときわ強い威光を放ってきた。建設は中世12世紀半ばに始まり、完成までおよそ200年を要した。宗教宮殿やルーヴル美術館な



ダヴィッド「ナポレオンの戴冠式」

ノートルダム寺院は国民の「記憶の場」になつてきた。ルーヴル美術館蔵、アマメーシス提供

を奏でていた。

歴史の舞台にもなってきた。ナポレオンは1804年、皇帝になるための戴冠式を、ローマ法王を臨席させてここで挙行了した。画家ダヴィッドの有名な作品に描かれているとおりである。20世紀には2度の大戦中、平和を祈願するミサがおそ、そかに挙げられ、終戦に際しては歓喜の鐘が打ち鳴らされた。大統領だったドゴールやミッテランの葬儀が営まれたのもここである。ノートルダム大聖堂は立場の違いや集団の対立を超えて、国民の心を結びつける役割を果たしてきた「記憶の場」にはかならない。

↑↑↑

とはいえこの大聖堂も、一時期は冷遇され、反カトリックだったフランス革命時代には掠奪と破壊に遭った。中世建築の美を再発見し、「ゴシックバイバル」をもたらしながら19世紀ロマン主義である。中世のノートルダム大聖堂を舞台に

したユゴーの歴史小説『ノートルダム・ド・パリ』(1831年)は、そのような時代背景のもとで書かれた。そしてユゴー自身、中世建築物の修復を唱えていくことになる。19世紀以降の絵画や版画でも大聖堂は重要なモチーフであり続け、写真はしばしば被写体にしてきた。

ノートルダム大聖堂がなければ、パリの歴史と風景は不完全であらう。だからこそ今回の火災は、パリの象徴を損ない、フランス人の魂を傷つけた国家の悲劇だ、と人々が嘆いたのである。

しかし絶望することはない。鎮火した後、消防隊員が大聖堂の崩落した屋根の残骸が床に散乱していた。ところが主祭壇に設置されている大きな十字架は無事で、光に照らされて燦然と輝いた。まさに奇跡! 聖母マリアのご加護かもしれない。大聖堂の一日も早い再建を祈りたい。

ど、ほかにもある。ノートルダム大聖堂はフランスとパリの歴史や文化において、それと異なる役割を果たし、存在感の大きさを示してきたからである。

↑↑↑

ノートルダムはフランス語で「われらが貴婦人」という意味で、聖母マリアを指す。聖母に捧げられた教会はフランス各地にあるが、パリの大聖堂はカトリック信仰の中心

で首都を照らしてきた。建築としては、中世の技術と美意識を凝縮させたゴシック様式の精髓を表す。北フランスには、他のヨーロッパ諸国以上にゴシック芸術の傑作が多いが、ノートルダム大聖堂はきわめつきの傑作である。荘厳な外観、美しい彫刻に飾られた正面、その上に伸びる二つの塔、鮮やかな色彩を見せるステンドグラス――すべてが華麗なハーモニ